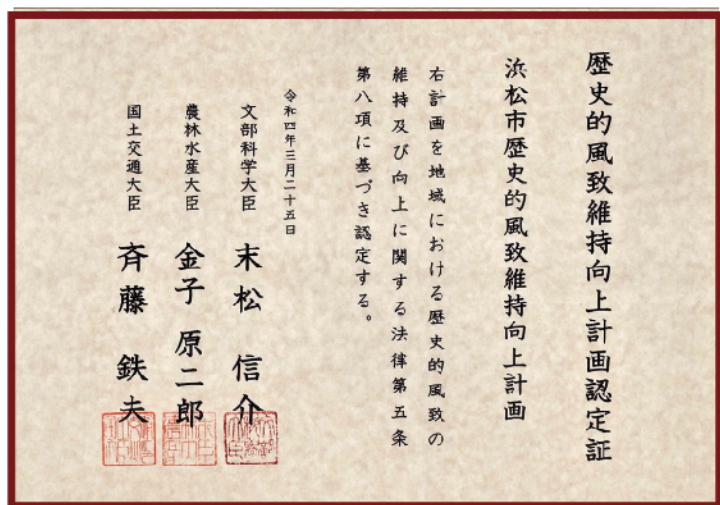
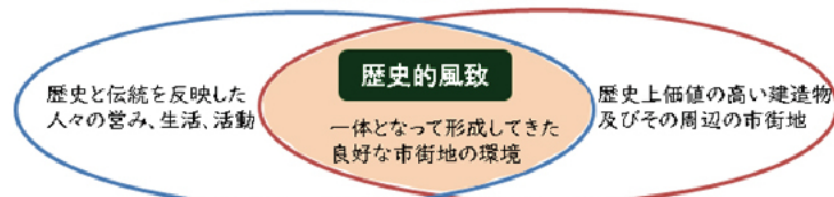




歴史的風致維持向上計画（歴史まちづくり計画） 国の認定を受けました



本市は、全国第二位の市域面積（一五五八平方キロメートル）を有しており、中心部の都会的な側面だけでなく雄大な自然をたたえた中山間地域や、遠州灘、浜名湖、天竜川、三方原台地といった「海」「山」「川」「里」「湖」によって構成される「国土縮図型」都市の美しい風土が広がっています。また、本市には、戦国時代の城跡や浜名湖周辺の社寺をはじめ、江戸時代からのみかん栽培やノリ養殖、近代の開拓による茶や馬鈴薯の栽培など、自然の恵みを受けた先人たちが営み続けてきた景観が市内各地に見られます。

市内の各地に社寺や古民家が残され、地域固有の祭礼行事や文化的な活動が受け継がれており、そうした歴史的建造物と

市民の織りなす伝統的活動が一体となって、浜松市の歴史的風致を形成しています。

■歴史的風致とは

歴史まちづくり法で「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義（法第一条）されており、ハードとしての建造物と、ソフトとしての人々の活動を一体的にとらえている点が大きな特長となっています。そのため、単に歴史上価値の高い建造物が存在するだけでなく、地域の歴史と伝統を反映した人々の活動が展開されていることで、はじめて歴史的風致が形成されることとなります。

令和六年一月現在、全国で九三都市が国の認定を受けています。

浜松歴まち散歩

歴史的風致
広報
第001号



浜松市歴史的風致維持向上計画
令和4年3月

発行／浜松市都市整備部 土地政策課 景観・歴史まちづくりグループ



浜松まつり御殿屋台と浜松城



蜷塚遺跡清掃活動



御田打ち（粉播き）



秋葉山表参道

01.浜松城下の営みにみる 歴史的風致

浜松城下町の市街地や社寺を舞台に、浜松まつりや遠州大念仏など四季を通じて地域固有の伝統行事が継承されている。



遠州大念仏

02.佐鳴湖のめぐみに育まれる 歴史的風致

蜷塚遺跡や佐鳴湖畔の市街地を舞台に、漕艇・清掃・娯楽・調査研究など人々の活動が受け継がれている。



佐鳴湖の漁港

03.天竜川下流の荘園から継承された 歴史的風致

天竜川下流域に広がる荘園の区画を残した集落の神社では、式年遷宮など地域性豊かな祭礼が伝えられている。



蒲神明宮（令和6年元日）

維持向上すべき 歴史的風致

歴史的風致は、地域の歴史、文化及び伝統を伝える重要な地域資源です。歴史的風致を維持し向上させることは、交流人口・関係人口の増加など地域活性化につながるだけでなく、各地域の誇りの確立や固有の伝統文化を継承しようとする意識の醸成に寄与するものとなります。

浜松市の歴史まちづくり計画では、十二件の歴史的風致を設定しています。それぞれの歴史的風致の概要について、本号から第四号までの紙面で順次紹介いたします。

編集後記

歴史的風致という言葉は初めて聞いたという人も多いかと思いますが、ちなみに風致という言葉は「自然の風景などのものおもひき。味わい」と辞書に記されています。そこに歴史が付されると、「人々の営みによって紡がれた物語がある風情・情緒・たえずまいを醸し出す環境」と理解することができます。

十二市町村が合併して、現在の浜松市が誕生しましたが、市域が東西南北に広く、同じ市内でも地域ごとに多様な歴史・文化を有しています。地域の個性を大切にして歴史的風致の情報を発信していければと思います。

広報紙名は「歴まち散歩」としました。東西南北に広い浜松市ですが、本紙を持って散歩気分が各地域に足を運んでいただければ幸いです。

「年二回発行／市役所等窓口で配架予定」

【歴史的風致の一例】

塩の道と呼ばれた秋葉街道の宿場町として栄えた水窪町市街地において、静岡県選定無形民俗文化財である「水窪町の念仏踊（神原の虫送り）」や浜松地域遺産「八幡神楽」等の行事が継続的に実施され、良好な市街地の環境を形成しています。（天竜区水窪町）



八幡神楽



神原の虫送り

電話〇五三ー四五七ー二六五六



細江神社を出発した7台の山車

二日間ある祭の初日は赤池様祭です。細江神社の近くにある赤池に御神輿を移す。
して神事が行われます。この赤池は、ご神体が流れ着いた所で里人が仮宮を立てて守ったと言われており、その名残で仮宮の東側が東仮屋、西側が西仮屋と地名が残っています。二日目の本祭は細江神社境内の入口にある仮宮で待つていた御神輿に気賀七地区の出引きと呼ばれる山車が合流します。行列には四神旗と幟旗を持った役員と御神輿・猿田彦・御鷹様・神楽を奉納する女子の小学生・各地の氏子代表が加わります。一行は都田川の対岸にある油田の屯倉水神社の北側にある井口河岸で神事を行いそれぞれ船に乗ります。



ご神体を船に乗せ海上渡御が始まる

午後八時ごろ細江神社入口に着いた御神輿は氏子に担がれ階段をいっきに駆け上がり本殿に帰還させます。その後、次々に山車が到着し境内では祇園ばやしの乱舞が始まります。その時、本殿では祇園祭の無事終わることの神事が行われています。時を経て山車が自分たちの地域に笛太鼓を囃子ながら去って終了となります。



細江神社に戻ってきた山車

約三百年の歴史

この祭りがいつ頃から始まったかは解りませんが、牛頭天王御祭礼記には250年前の記録があり、そのなかに数十年ぶりに村々を回るようになったとあります。250年以上300年くらいは続けられてきたことと思われま



井口河岸での神事 神楽の奉納

船渡御は祇園ばやしを奏ながら都田川を下り引佐細江の海岸にある伊目寸座↓下村と巡ります。下村のプリンス岬に上陸して気賀まで山車の提灯に明かりを灯して祇園ばやしを奏ながら姫街道沿いの下村↓跡川↓呉石↓上町と地域を陸渡御します。



ご神体が漂着した赤池様公園で神事を行う

祇園祭は二日行われ、初日は七地域の山車と御神輿が気賀商店街を巡行します。次の日は山車を共に引佐細江を船渡御し、プリンス岬に上陸。夜間、陸渡御しながら神社へ戻ります。ところが近年都田川の川底に土砂がたまり浅くなつたことで山車を乗せて船渡御が出来なくなつてしまいました。以前は御神輿を乗せた船が先頭で七隻の船に乗った山車がにぎやかに太鼓と笛で囃し立てながら出航したものです。また船の調達もままならず七つの山車を乗せるのに十四隻の船を用意しなければならず集めるのがたいへんです。



山車を繰り出す若者たち

奥浜名湖の引佐細江の湖を水上渡御する細江神社の祇園祭は初夏の風物詩になっています。祇園祭は夏の病気や災いから地域を守る牛頭天王の祭として行われてきました。明治までは、お天王さまの祭として伝えられてきました。災いから地域を守る信仰は、この細江神社のご神体が明応七年（二四九八）の大地震で浜名湖が切れて外洋と繋がったとき新居にあった「角避比古神社」が地震と津波で流没してしまい、その後、御神体が浜名湖の幾つかの地を経て、この赤池の地に漂着されて神社に牛頭天王社として祀られたことに始まります。それゆえ神様もここに避難して守ってもらったことから地震の神様と言われるようになりました。また、安政の地震では浜名湖の周りの田が津波で塩水が入りお米が取れなくなりました。そこで塩水にも強い備後から取り寄せた琉球の苗を植えたところ温暖な地でもあるこの地で立派な畳表になる蘭草が出来ました。大々的な生産が始まり、この地域を救ったのです。江戸では遠州の畳表として重宝され、いまでは復興の神様として蘭草神社が明治に建てられました。

奥浜名湖の社寺と祭礼にみる歴史的風致

細江神社祇園祭

細江神社のご神体は津波によって運ばれた

細江神社の祇園祭は初夏の風物詩